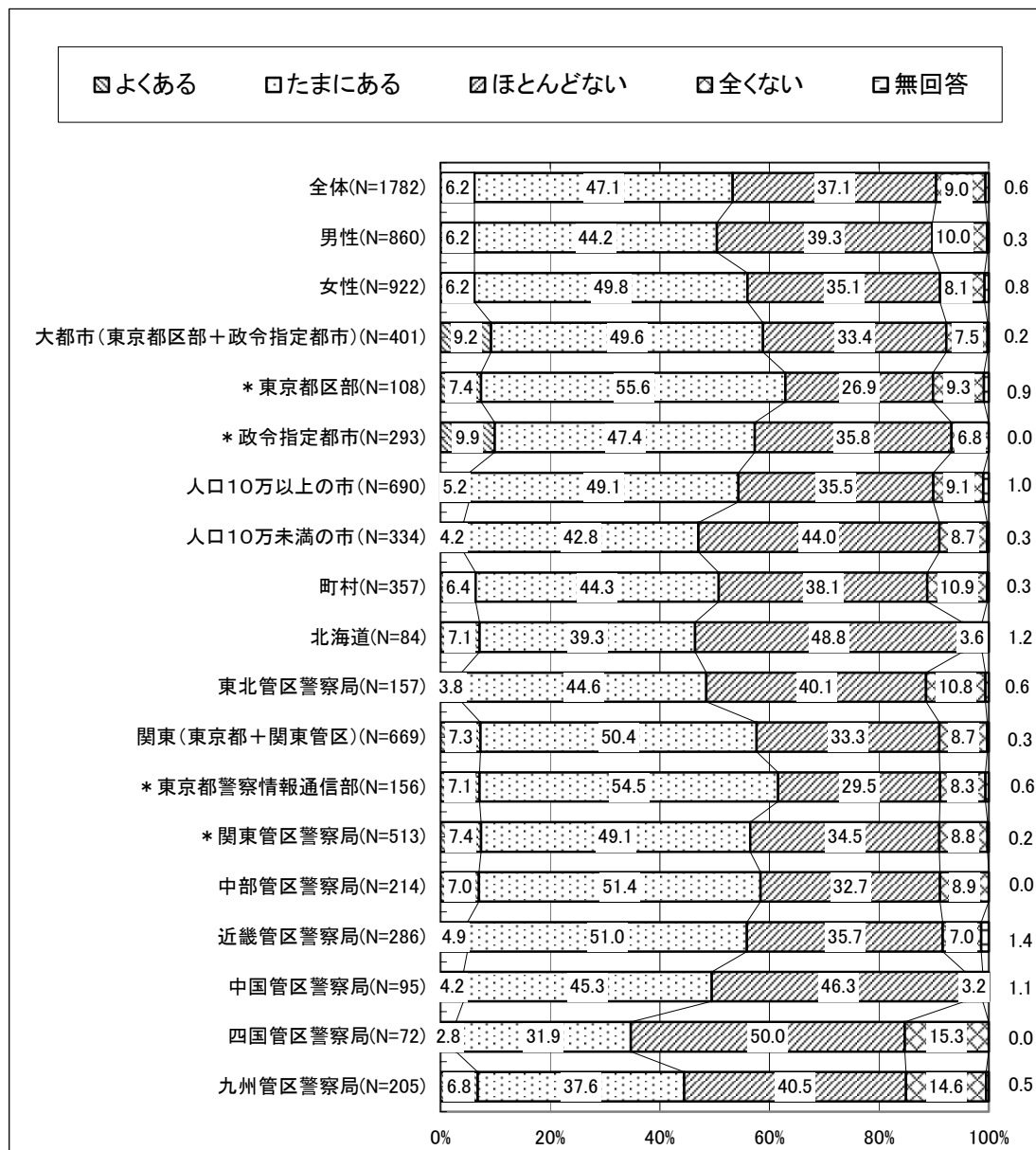


第2章 犯罪被害に対する不安感

1. 日常感じている不安感

設問「あなたご自身が、日頃、犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることはありませんか」と尋ねた。結果は図Ⅱ-2-1のとおりである。

図Ⅱ-2-1 犯罪に対する不安感の有無（男女別、都市規模別、管区別）



不安を感じる事が「よくある」と「たまにある」を合計すると、全体では53.3%、男性は50.4%、女性は56.0%になる。逆に「全くない」は、全体では9.0%、男性10.0%、女性8.1%にとどまる。すなわちほとんどの人が、多少なりとも犯罪被害と無縁でないと感じている。

年齢別（図省略）では、30代、40代でやや高くなるが、その他の年代に比べて統計的に有意で高いとは言えない。

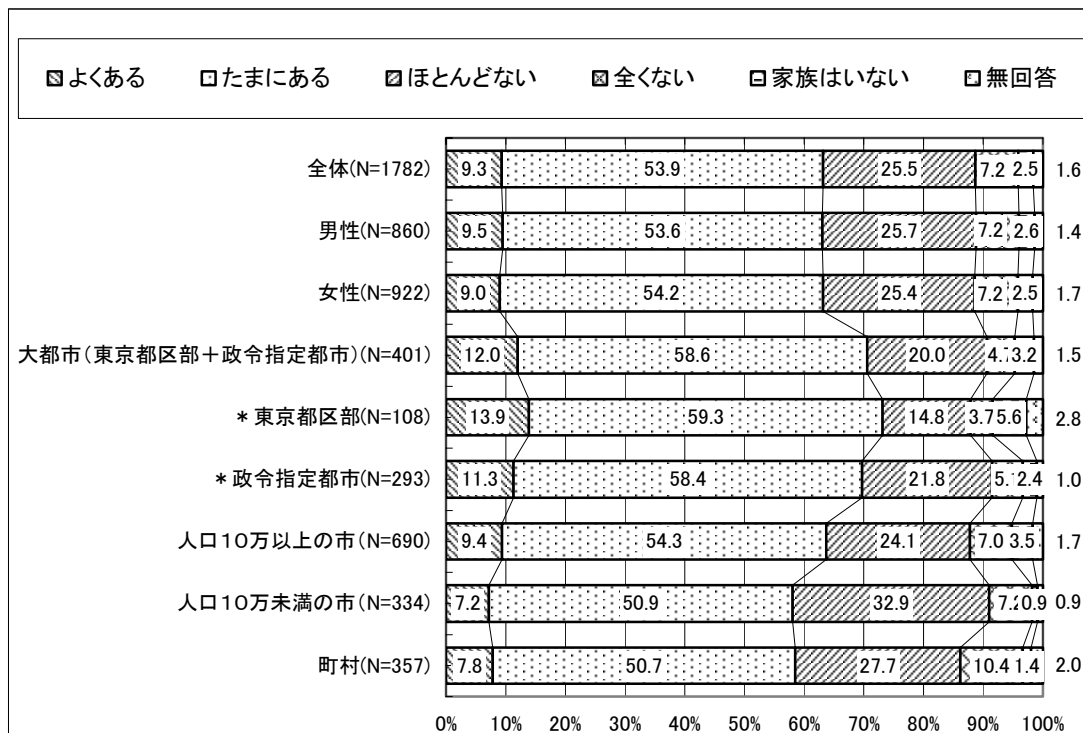
都市規模別では、大都市（「よくある」と「たまにある」の合計回答率は58.8%）および10万以上都市（同54.3%）でやや高く、10万未満（同47.0%）と町村（同50.7%）でやや低い。

警察管区別では比較的大きな違いが見られ、「よくある」と「たまにある」合計が6割を越えたのが東京都(61.6%)、6割近いのが中部(58.4%)、関東(56.5%)、近畿(55.9%)の3管区、4割5分前後が中国(49.5%)、北海道(46.4%)、九州(44.4%)の3管区、四国は3割台(34.7%)であった。

2. 家族が被害にあう不安感

設問「あなたの同居の家族が、犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることはありませんか」と尋ねた。結果は次の図Ⅱ-2-2に示した。

図Ⅱ-2-2 同居家族が被害に遭う不安（男女別、都市規模別）



「よくある」と「たまにある」の合計は、全体では63.2%、男性は63.1%、女性は63.2%で、男女間で違いはない。またこの比率は、前問で本人だけが答えた場合に比べ、家族が加わった場合は、およそ10ポイント高くなっている。

都市規模別では、大都市(70.6%)、10万以上(63.7%)、10万未満(58.1%)、町村(58.5%)の順に低くなる。管区別は省略した。

3. 家族に被害を与えた相手

設問「あなた、あるいは同居の家族のだれかが、この1年間に、次の人から犯罪の被害を受けたことがありますか」と尋ねた。選択肢は、「暴力団」「来日外国人」「少年」「その他」とした。

全体として、加害者の種類は、暴力団(0.5%)、来日外国人(0.4%)、少年(1.3%)、その他(6.2%)の回答で、パーセントの延べ合計は8.4%であった。問1で被害体験を答えた割合が30.3%であったのに比べ、被害者において加害者が特定された場合はごく少数にとどまっている。(その理由としては、被害者が被害を警察に届けていない、加害者が検挙されていない、検挙されても被害者に情報提供がない、などが想定される。)特定されていない場合が大多数だったので、この結果に分析は加えない。

4. 自身および家族の犯罪被害に対する不安感—罪種別

設問「あなたは、日頃、あなた自身や同居の家族が犯罪の被害にあうのではという不安をどの程度感じていますか」と尋ね、16種(17番目に「その他」を設け、自由に書いてもらった)の犯罪を並べ、それぞれ罪種毎に回答を求めた。回答選択肢は「非常に不安」「かなり不安」「やや不安」「不安はない」の4種である。

結果は次頁の表Ⅱ-2-1に示した。

非常に、かなり、やや不安、3種の回答合計が高い順に、「自宅にどろぼう(空き巣など)に入られる」(78.3%)、「自宅や敷地内に無断で侵入される」(62.7%)、「悪質商法などの詐欺犯罪にあう」(61.2%)、「ひったくりにあう」(61.6%)、「暴行・傷害などの暴力的犯罪にあう」(59.5%)、が上位にきた。

一方、「痴漢」(37.7%)、「テロリスト」(41.2%)、「インターネット利用犯罪」(43.1%)等は、被害当事者が特定の人または特定の場所に限られるので、全体としては不安感を持つ人の割合が低くなっている。

この回答に関する分析は第Ⅲ部第3章にある。

表Ⅱ－２－１ 各種犯罪に対する不安の程度

	非常に不安	かなり不安	やや不安	不安はない	無回答
a) 暴行や傷害などの暴力的な犯罪にあう不安	3.0	6.9	49.6	36.1	4.4
b) 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる不安	7.8	14.4	57.1	18.5	2.2
c) ひったくりにあう不安	3.9	10.4	47.3	34.7	3.7
d) 自転車が盗まれる不安	6.5	11.9	36.3	40.8	4.5
e) 自動車やオートバイが盗まれる不安	3.2	8.8	38.2	44.4	5.4
f) すりにあう不安	2.3	7.6	44.6	41.1	4.4
g) 自動車内の金品を盗まれる不安	3.6	9.2	39.0	43.4	4.7
h) 痴漢にあう不安	2.0	5.9	29.8	57.4	4.9
i) 悪質商法などの詐欺犯罪にあう不安	4.8	13.4	43.0	35.1	3.7
j) 自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりする不安	3.6	9.4	39.5	43.2	4.2
k) 自宅や敷地内に無断で侵入される不安	4.7	13.0	45.0	33.8	3.6
l) 子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする不安	7.7	13.9	30.9	42.0	5.6
m) 人につきまとわれたり、のぞかれたりする不安	3.6	8.6	36.9	46.2	4.6
n) インターネットを利用した犯罪の被害にあう不安	3.8	8.5	30.8	52.5	4.4
o) 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗、強姦）にまきこまれる不安	4.0	7.8	40.9	42.8	4.5
p) テロリストによる犯罪に巻き込まれる不安	3.2	5.8	32.2	54.6	4.2
q) その他の不安（具体的に)	1.2	1.7	5.8	36.8	54.5

5. 自身と家族が犯罪被害にあう可能性（リスク）知覚－罪種別

設問「あなた自身や同居の家族が今後1年間に、犯罪の被害にあう可能性がどの程度あると思っていますか」と尋ね、前問と同じ16の犯罪を並べて、可能性に関する回答を求めた。選択肢は「かなりある」「少しある」「ほとんどない」「全くない」の4種である。

全体の結果は表Ⅱ－２－２に示した。

被害可能性が「かなりある」と「少しある」の合計値が高い順に、「どろぼう」(49.2%)、「無断侵入」(39.2%)、「ひったくり」(39.1%)、「悪質商法」(36.4%)、「暴行・傷害」(25.3%)の5種が上げられ、これら5種は、前問の不安感の高い罪種と全く同一であった。

表Ⅱ－２－２ 各種犯罪被害にあう可能性の判断（リスク知覚）

	かなりある	少しある	ほとんどない	全くない	無回答
a) 暴行や傷害などの暴力的な犯罪にあう可能性	1.7	23.6	49.0	21.8	3.9
b) 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる可能性	7.1	42.1	36.5	12.1	2.2
c) ひったくりにあう可能性	3.5	34.6	39.7	18.7	3.5
d) 自転車が盗まれる可能性	7.7	35.6	27.3	25.5	3.8
e) 自動車やオートバイが盗まれる可能性	3.7	29.0	35.6	27.3	4.4
f) すりにあう可能性	2.6	29.1	42.0	22.7	3.5
g) 自動車内の金品を盗まれる可能性	4.3	28.6	34.0	28.3	4.7
h) 痴漢にあう可能性	1.6	21.5	34.7	37.8	4.4
i) 悪質商法などの詐欺犯罪にあう可能性	5.2	31.2	38.6	22.0	3.0
j) 自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりする可能性	3.6	29.6	38.7	24.2	3.9
k) 自宅や敷地内に無断で侵入される可能性	5.2	34.0	37.3	20.0	3.5
l) 子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする可能性	7.8	26.5	26.2	34.3	5.2
m) 人につきまとわれたり、のぞかれたりする可能性	3.0	24.7	39.6	28.7	4.0
n) インターネットを利用した犯罪の被害にあう可能性	3.9	21.2	32.7	37.9	4.3
o) 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗、強姦）にまきこまれる可能性	2.0	22.2	41.2	30.4	4.2
p) テロリストによる犯罪に巻き込まれる可能性	2.1	17.3	37.5	39.2	3.8
q) その他の犯罪被害の可能性（具体的に）	0.6	4.3	14.6	29.1	51.4

6. 犯罪被害に対する不安量およびリスク知覚の総量試算

以上では、犯罪被害に対する不安感と、被害にあう可能性（リスク知覚）を、罪種別に尋ねた。その結果から、16種の犯罪を通じて、各個人が持っている不安感とリスク知覚の総量を試算することで、各種の分析を試みようとした。

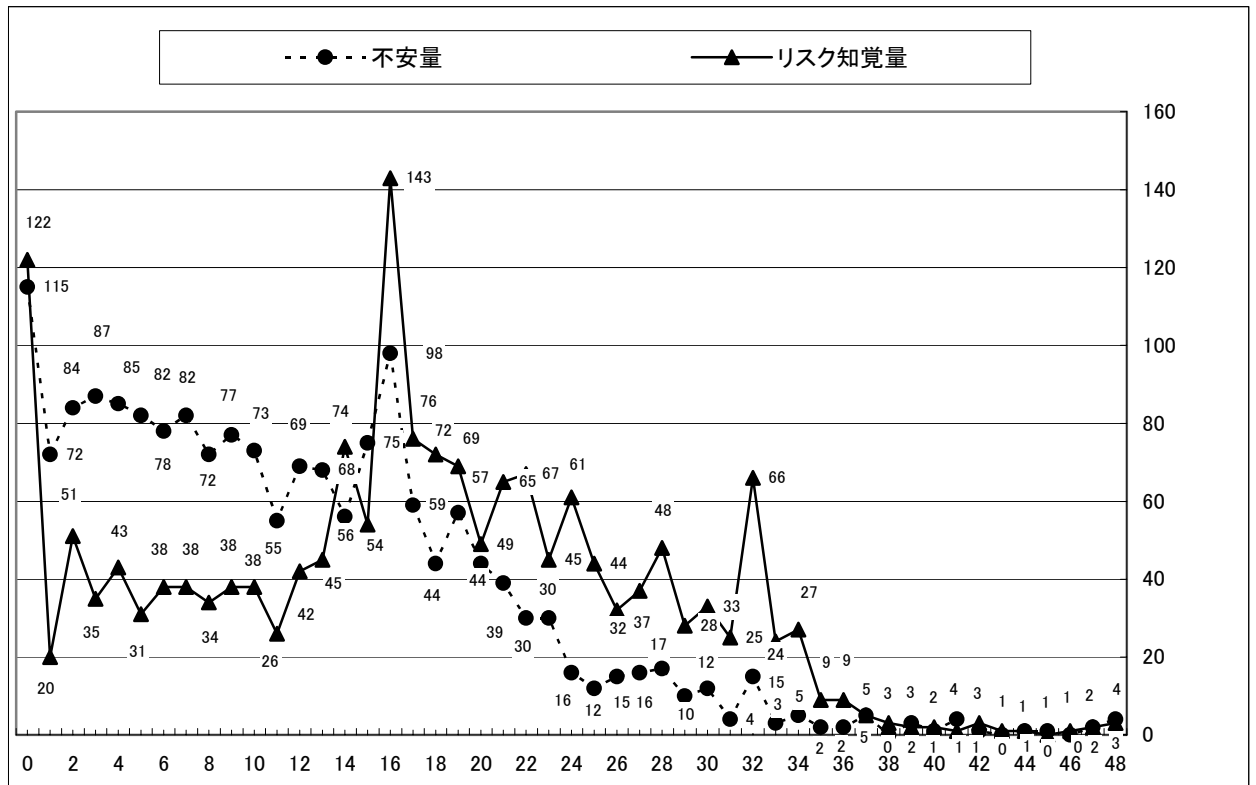
総量の試算としては、次の方法を用いた。不安量については、16種の犯罪被害に対する不安の程度がそれぞれ、「非常に不安」「かなり不安」「やや不安」「不安はない」の順に、3点、2点、1点、0点を与え、その総和をもって個人の不安総量とみた。最高が48点、最低が0点になる。

同様に犯罪被害に対するリスク知覚量については、16種の犯罪被害に対するリスクの程度がそれぞれ「かなりある」「少しある」「ほとんどない」「全くない」の順に、3点、

2点、1点、0点を与え、その総和をもって個人の犯罪被害リスク知覚総量とみた。最高が48点、最低が0点になる。

その分布は次の図Ⅱ-2-3のようになった。

図Ⅱ-2-3 犯罪被害に対する不安量とリスク知覚量の分布



この分布から、回答者各個人の不安量とリスク知覚量の程度を3段階に分類した。すなわち、不安量については、「低群」0-4点、「中群」5-16点、「高群」17点以上の3段階、リスク知覚量は、「低群」0-10点、「中群」11-24点、「高群」25点以上の3段階である。

この3段階の分類は、低い者と高い者を対象者の4分の1ずつ、中間を2分の1とする四分位偏差に近づけたものである。結果として、対象者の分布は次の表Ⅱ-2-3のようになった。

表Ⅱ-2-3 不安量、リスク知覚量の分布

	不安量	リスク知覚量
低群	4 4 3 人 (24.9%)	4 5 0 人 (25.2%)
中群	8 8 5 人 (49.7%)	8 6 5 人 (48.5%)
高群	4 5 4 人 (25.5%)	4 6 7 人 (26.2%)

以上の分布を男女別に見ると、次の表Ⅱ－２－４になる。

表Ⅱ－２－４ 男女別、不安量、リスク知覚量

	不安量		リスク知覚量	
	男(860人)	女(922人)	男(860人)	女(922人)
低群	233(27.1)	210(22.8)	249(29.0)	239(25.9)
中群	432(50.2)	453(49.1)	412(47.9)	415(45.0)
高群	195(22.7)	259(28.1)	199(23.1)	268(29.1)

表に見るように、男女それぞれの、各罪種に対する被害不安量と被害リスク知覚量の総和を、同一基準で区分すると、不安量・リスク知覚量双方とも、女性では男性よりも高い者が多く、低い者が少ない。

都市規模別にこの基準で区分すると、「高群」に区分された割合は、不安量・リスク量のそれぞれについて、大都市住民は26.7%と29.7%、人口10万以上都市では29.3%と29.0%、人口10万未満都市は22.8%と23.7%、町村では19.4%と18.8%である。

人口10万以上都市と大都市では差がないが、10万未満になると不安量、リスク量の面で「高群」に区分される人がずいぶん少なくなり、町村ではさらに少なくなる。

管区別に(不安量/リスク量)が「高群」に区分された割合(%)は、北海道(26.2/21.4)、東北(19.7/21.7)、東京(26.3/31.4)、関東(27.7/28.5)、中部(30.8/37.9)、近畿(28.0/22.7)、中国(25.3/21.0)、四国(12.5/9.7)、九州(19.0/20.5)、であった。

以上からは次のような知見が析出される。まず不安量とリスク量は、かなり相関しており、男女別、都市規模別では、一方が高ければ他方も高くなる傾向を示す。

すなわち、不安量・リスク量とも、女性は男性よりも高い者が多く、逆に男性では共に低い者が多い。都市規模では、大きい都市ほど不安量とリスク量共に高くなる傾向があり、町村では共にかなり少ない傾向がある。

管区別にみると、不安量とリスク知覚量の合計値の高い割合は、関東(東京含む)・中部・近畿は同程度に高い者が多く、次いで北海道・中国が同程度に多く、次いでは東北と九州が同程度で、四国は特別に少ない。

また不安量・リスク量が「高群」に区分された管区別の人数に注目すると、不安量が高い者の人数に比べてリスク量が同程度に高い管区と、一方だけが高い、あるいは低い管区がある。関東は同程度に高く、東北・九州は同程度に低く、四国は同程度に特に低い。以上に対し、近畿・中国は、不安量が「高群」と区分された者に比べてリスク量が「高群」に区分された者が少なく、逆に中部は、不安量が「高群」と区分された人数に比べてリスク量が「高群」に区分された者が非常に多くなっている。

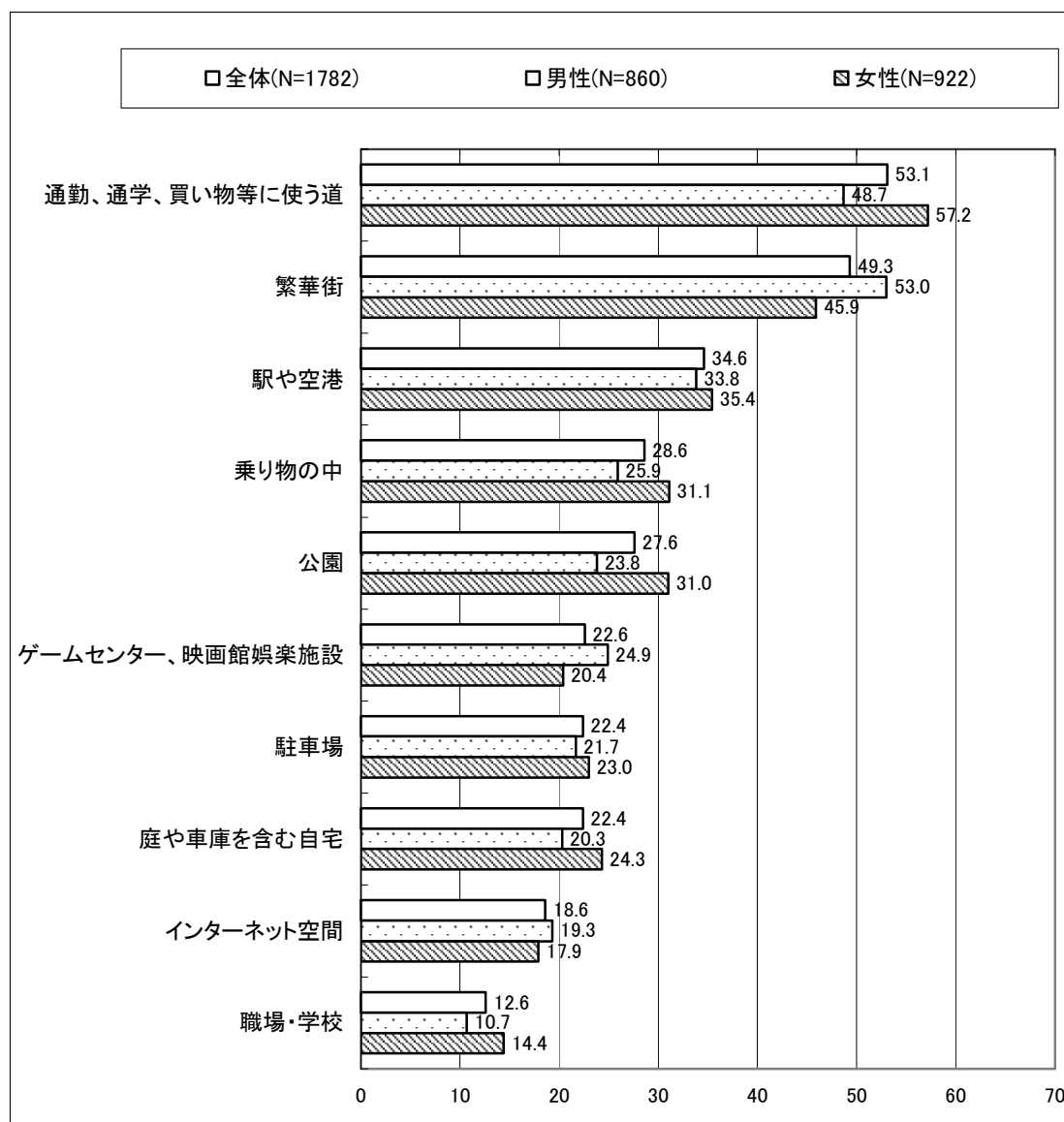
これらの違いが生じた理由はここでは不明だが、あえて推論すると、不安量を情緒的反

応と見なし、リスク量を理性的反応と見なすと、一般的にはこの両者の反応は平衡するが、近畿と中国では情緒的反応が先行する方が多く、中部では理性的反応が先行する方が多いという傾向があるのかもしれない。

7. 犯罪被害への不安感が生じる場所

設問「あなたは日常の行動範囲にあるどのような場所で、あなた自身や同居の家族が犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じるがありますか」と尋ね、不安を感じる場所全てに○(マル)をつけてもらった。結果は次の図Ⅱ-2-4になる。

図Ⅱ-2-4 犯罪被害への不安が生じる場所



全体としてみると、不安の高い場所は、①「通勤、通学、買い物等に使う道」(53.1%)、②「繁華街」(49.3%)、③「駅や空港」(34.6%)、④「乗り物の中」(28.6%)、⑤「公園」(27.6%)、の順になった。当然ながら、出入りが特定の人に限定される「職場、学校」は少なく(12.6%)、「インターネット空間」(18.6%)はまだ利用者が限定されているので少ない。

男女間では総じて女性の方が、どの場所に対しても不安が高いが、繁華街、ゲームセンター等娯楽施設、インターネット空間だけは男性の方がやや高い。

都市規模別では、総じて大都市ほど高く、小都市・町村になるほど低くなるが、この傾向が顕著なのは、駅や空港、繁華街、乗り物内、公園、等である。

管区別の違いを検討すると、総じて前節で述べたように、不安総量、リスク知覚総量の高い管区では、各場所に対する不安量も高くなっている。ただし、駐車場、公園、通勤・通学路、娯楽施設等では、管区間の違いはごく小さい。

8. 住まいの地域で不安を感じる対象者・物・情報

設問「あなたは今お住まいの地域で、次のような状況を実際に見聞きして不安を感じる
ことがありますか」と尋ね、感じる全てに○(マル)をつけてもらった。

結果は図Ⅱ-2-5(次頁)に示した。

設問した10の対象者・物に対し、全体で最も多かったのは、①「しっこい各種勧誘活動」(35.4%)、以下、②「暴走族による交通の危険や騒音」(28.4%)、③「少年の横暴な行動や非行」(23.9%)、④「(いたずら電話を含む)からまれたり言いがかりをつけられる」(20.7%)、等であった。

男女間を比べると、この設問では全体として、男性の方が多く○(不安あり)をつけた。中でも、少年の横暴・非行、暴走族、には男性が多く反応し、「子どもが見知らぬ人に声をかけられる」だけは、女性の方が多く反応した。

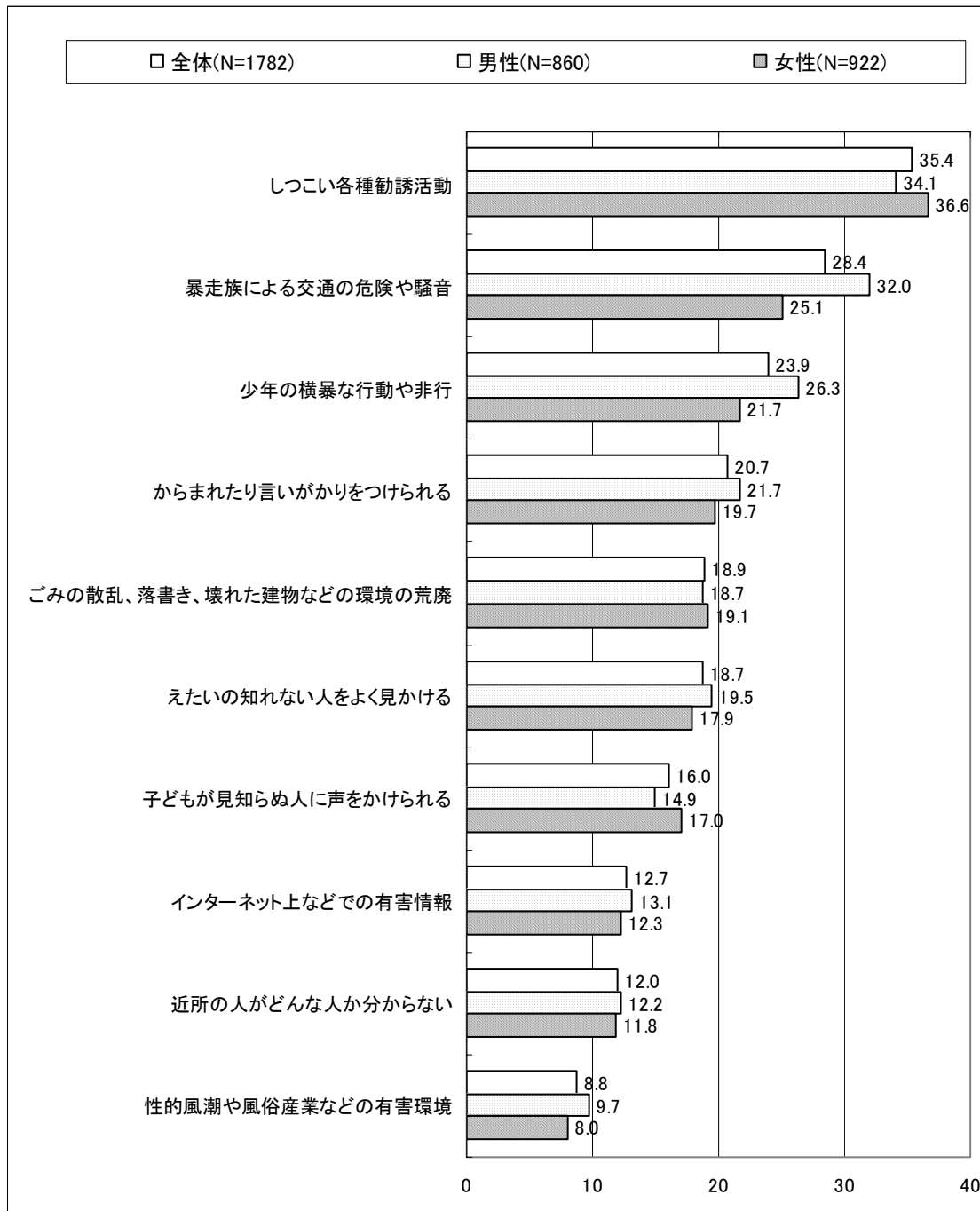
都市規模別に、不安対象になることの多かった上記4種について比較した。しっこい勧誘と、からまれたり言いがかりは、都市規模に関係なく同程度、暴走族は東京で比較的低い他は同程度、少年の非行は大都市で多く小都市・町村で少ない。その他の行為では、町村はほとんどについてもっとも少なくなっている。

各行為に対し、不安を示した反応率が、9管区内で1番多かった管区を見ると、例示した10の行為中東京が5つ(しっこい勧誘、ごみの散乱等、性風俗等有害環境、近所の人分からない、インターネット上情報)、中部が4つ(得体の知れない人を見る、子どもが見知らぬ人に声をかけられる、暴走族、インターネット上の情報)、近畿が2つ(少年の横暴・非行、からまれたり言いがかり)、関東が1つ(暴走族)になった(ダブル・トッ

プが2種ある)。

以上のうち、飛び抜けて1位になっている項目はほとんどなく、多くは2位と大差がないが、いずれにせよこれらの結果は、各管区の特徴をある程度反映していよう。

図Ⅱ-2-5 地域内で不安を感じる対象



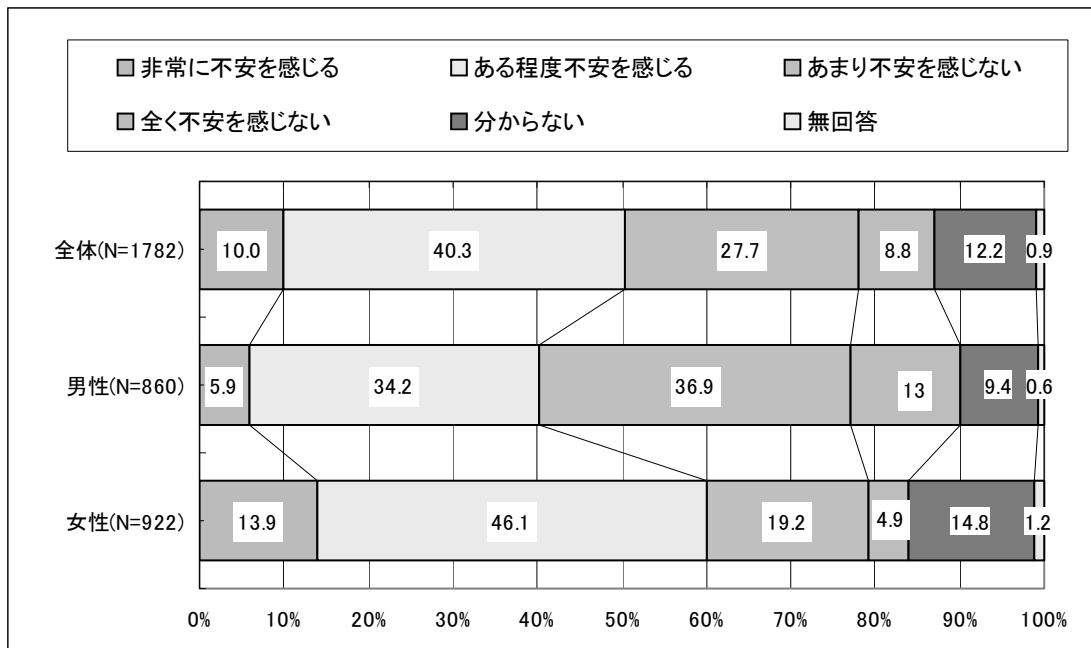
9. 夜間、地域内一人歩きに対する不安感

日常生活において、犯罪被害に対する不安をもっとも身近に感じる場面は、住んでいる地域内を夜間に歩いている場合であろう。この行動に関し、住民の大多数が不安を感じない地域が多い社会ならば、社会全体に対する体感的治安に信頼がある社会であり、ひと頃の我が国がまさに、その様な治安の良い社会であった。実際に我々は日本中どこに出向いても、どの地域でも住民が夜間、不安を示さず一人で歩いているのを見ており、日本人のほとんどが、我が国・社会の治安に不安を感じる事がなかった。

その様な観点から、国際的に体感治安の良否を測る指数として、この設問がなされた調査例があり、本調査でも援用した。

設問「あなたは夜 11 時を過ぎてから、住んでいる地域を 1 人で歩いているとき、犯罪にあう不安をどの程度感じていますか」と尋ねた。

図Ⅱ－２－６ 夜間一人歩きの不安の有無－男女別



図に見るように、全体では、「非常に不安を感じる」と「ある程度不安を感じる」の合計が 50.3%、「あまり不安を感じない」と「全く不安を感じない」の合計が 36.5%であり、不安を持つ人の方がかなり多い。

また男女別では大きな違いがあり、男性では「非常に」と「ある程度」不安ありの合計が 40.1%、逆に「あまり」と「全く」不安なしの合計が 49.9%であるのに対し、女性は不安ありが 60.0%、不安なしが 24.1% である（分からない、無回答を除く）。女性の過半数は、居住地内においても夜間の一人歩きに安心していない状況にいる。

この設問による我が国内の調査はこれまでみることがないので、以前との比較はできないが、この結果はやはり、最近の我が国の治安に信頼が置けない風潮を裏付けるものであろう。

年齢別では男女とも大きな違いを見せていない。

都市規模別では、「非常に」と「ある程度」不安ありの合計が、大都市 53.6%、人口 10 万以上都市 51.7%、人口 10 万未満 46.3%、町村 47.9%、である。都市が大きいほど不安を持つ人が増える傾向をみせるが、その傾向はごく弱く、むしろ我が国では、住民の夜間一人歩きの不安は都市規模と関係なく、どの都市でも一様に、この種の不安が高くなっているとみられよう。

警察管区別では、「非常に」と「ある程度」不安ありの合計が高い順に、関東 51.7%、東京 51.3%、近畿 50.7%、九州 49.2%、中部 48.9%、中国 48.4%、東北 41.6%、北海道 40.4%、四国 27.8%、の順になった。先に問 2 で日常感じる不安感を尋ねた結果と同様、ここでも四国が特別に低い他、東北と北海道がやや低く、その他の地域はほぼ同程度とみられる。